

『源氏絵本 藤の縁』(翻刻)

——付、源氏物語本文との対照——

岩 坪 健

『源氏絵本 藤の縁』とは、寛延四年(一七五二)に出版された、源氏物語の絵入り梗概書である。本稿では、その梗概本文を全文翻刻した。また、源氏物語本文と比較するため、北村季吟編『源氏物語 湖月抄』の本文も引用した。挿絵は紙面の都合により割愛したが、絵に関しては小稿「源氏絵に描かれた男女の比率について」絵入り版本を中心に(上・下)、「同志社国文」61・62、平成一六年一月・同一七年三月、本文に関しては小稿「『源氏絵本 藤の縁』の本文と梗概書との関わり」(「同志社国文」69、平成二〇年二月)において論じた。

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して、次の操作を行った。

1 句読点を付け、会話文などは「」で括り、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。

『源氏絵本 藤の縁』(翻刻)

- 2 誤写かと思われる箇所には、右側行間に(ママ)と記した。
 - 3 巻名の上に、通し番号(1~54)を付けた。なお巻名は、底本の表記をそのまま翻刻した。
- 二、底本と北村季吟『湖月抄』との本文を比較した。

- 4 和歌以外で両者が一致する箇所には、底本にa・b・cと付けた。
- 5 底本と一致する『湖月抄』の本文を、各巻末に列挙した。各文末には()内に巻名と頁数を示した。頁数は、有川武彦氏が校訂した『源氏物語湖月抄 増注』(上・中・下)(講談社学術文庫、昭和五七年)による。
- 6 b以下の巻が直前の場合、(同)と記した。さらに頁も同じ場合は、(同前)とした。
- 7 『湖月抄』の本文で中略した場合は、(略)と表記した。なお『湖月抄』の本文は読解の便宜を図り適宜、漢字に直したりした。私に付けた読み仮名は、『湖月抄』の仮名表記に従った。

〔付記〕本作品は岩坪ゼミで輪読して、担当者が翻刻を入力した。源氏物語本文と共通する箇所も担当者が調査した後、岩坪が取捨選択して『湖月抄』の本文に改めた。当該学生は、次の通りである。

木村美咲 武藤鮎美 日向智恵 下村綾菜 嶋津恵子 白井千夏 奥村洋平 小澤園子 小澤優香

1 桐壺

いとゞしく虫の音しげき朝ぢふに露おきそふる雲のうへ人

桐壺の更衣、秋の露ときへ給ひて、御門、御なけきふかく、鞞負の命婦して、更衣の母君へ御歌給ふ。折しも秋の庭の面、虫の声つくしければ、ゆげいの命婦、

鈴虫すずむしのこへのかきりをつくしてもななき夜あかすなみたる涙かな
とありければ、その返しとて、かくなんきこへ給ひしとなり。

2 帚木

木きからしに吹ふきあはすめる笛ふえの音をひきとゞむべき言ことばの葉はぞなき

左の馬の頭のかよひし女、またこと人に心かよはしけるに、此こと人、馬の頭のふかくかよゑるをしらで、馬の頭をともなひて、かの女のもとに行て、琴の音を聞て、

琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける
とい、やれば、女、かくなんきこへしとなり。

3 空蟬

うつせみの君は貞女ていじよにて、光君ひかるせちにしたひ給へどもしたかい奉らず。せめてはとりかへり給ふaこうちきの、いと
なつかしき人香かにしめるを、身ちかくならして見い給へり。女メデがbさすがにかのもぬけをいかに、

すゞか河いせをの海士かみのすて衣しほなれけりと人やみるらん
の心こころによろづにみだれたり。

a 小桂こけいのいとなつかしき人香かにしめるを、身近く馴らしつつ見お給へり。(空蟬 159頁) b さすがに取りて見た
まふ。かのもぬけをいかに、伊勢をの海人のしほなれてやなど思ふもただならず、いとよろづに乱れたり。(同

4夕顔

山の端はこころの心もしらで行月ゆくはうはの空そらにて影かげやたえなん

ひかる君きみ、夕顔ゆがなをたつね取給ひて、五条あたりの、a 小家いへかちなるむつかしきをいとひたまいて、b そのあたりちか近ちかきにがしの院いんに、同車どうしゃしてともない出給ふとて、道みちすがら歌に、

いにしへもかくやは人のまとひけん我われまたしらぬしの、めの道

との給ひければ、夕顔の君、かくなん詠し給ひしと也。

a 小家がちに、むつかしげなるわたりの(夕顔 165頁) b そのわたり近ちかきにがしの院いんに(同 192頁)

5若紫

かこつべき故ゆへを知らねば覚おぼ束つかないかなる草のゆかりなるらん

源中將ちゅうざう、紫のうへのいわけなきすがたの垣かきまみより藤つぼのゆかり恋こひしく、せちにこひ給ひ、京なる祖母おは君のやどりへたつね給ひて、紫のうへを見給ひて、

ねはみねどあわれとぞおもふむさしの、露つゆわけわぶる草のゆかりを

と詠あしたまひければ、紫のうへなにも思ひわけたまわず、ふしんにおぼしてかくなん。

6 末摘花

里わかぬかけを見れど行月の入さの山をたれか尋ぬる

大輔の命婦、あないして、末つむ花の常陸の古宮におわせしに、源氏の君を忍ひて入奉る。おりしも頭の中將と、
大内をもろともにかへるさのわかれより、忍ひ給ひければ、頭の君いぶかしく思ひて、したひ給へば、此みやにてお
はしけり。さればとておどろかし給ひて、

諸ともに大内山は出つれど入かたみせぬいざよいの月

bと恨給へば、かくこたへ給ふ。

a内裏よりももろともにかまでたまひける (末摘花 319頁) bと恨むるもねたけれど (同 320頁)

7 紅葉賀

さ、わけは人やとがめんいつとなく駒なつくめるもりの木かくれ

aとし老たれど、人もやんごとなく心ばせある、源内侍のすけといへる人あり。bいみじうあだめいたる心さまなる
を、源氏の君cたはふれこといひふれて心みたまへば、内侍のすけ、

君しこばたなれの駒にかりかはむさかり過たる下葉なりとも

とよみたれば、源中將かく御返しあり。

a年いたう老いたる内侍のすけ、人もやんごとなく心ばせありて (紅葉賀 390頁) bいみじうあだめいたる心

さまにて (同前) c戯れごとと言ひふれて心みたまふに (同前)

8 花宴

心ゐるかたならませば弓張(ゆみはり)の月なきそらにまよはましやは

光君、花のゑんの夜、a ころきでんの切(ママ)どのにて、朧月(おぼろ)の君にゆめ計ものの給ひて、わかれ給ひしか、たれともおほしのためかたきに、其後、左大臣殿(ママ)にて、藤の宴(ふじ えん)に参り給ひて、b 五、六の君をc いづれそ、とうたがはしくて、

あつさ弓(ママ)いるさの山にまとふかなほのみし月のかけやみゆる

とありしかは、朧月の君かく詠し給ひしかは、それと知給(しり)ふとかや。

a 弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば(花宴 41頁) b 五六の君ならんかし(同 414頁) c いづれならんと胸

うちつぶれて(同 424頁)

9 あふひ

浅見(あさみ)にや人はおりたつ我かたは身もそほつまでふかき恋路(こいぢ)を

御息所(みやす)、加茂の祭りの車(まつ)あらそひの後、いよゝ世をあじきなくおほせしか、源氏(げんし)の君も、あまりかれゝもうらみがちならんと思(おも)ひて、消息(しやうし)し給ひし御返事(かへりごと)にかくなん、

袖ぬる、恋路とかつはしりながらおりたつたこのみづからぞうき

とありしかばあはれと思(おも)ひて、かく御かへし。

10 さかき

御息所、たけのみやこにおもむき給ふに、御下こうの道すから、^a二条院の御まへなれば、^b光君もいとあはれとあぼして、

ふりすて、けふは行ともすゞか河八十瀬のなみに袖はぬれしや

ときこへたまへば、^c関のあなたより御かへし、

すゞか河八十瀬のなみはぬれくいせまでたれかおもひをこせん

^a二条院の前なれば(賢木 506頁) ^b大将の君いとあはれに思されて(同前) ^c関のあなたよりぞ御返しある。(同前)

11 花散里

時鳥^aかたらふ声はそれなからあなおほつかな五月雨の空

源大将、^b人しれぬ御心づからの物思はしさに、花散里の御もとへおはする道すがらに、^cさ、やかなる家の木立などよしはめるお、よく見給へば、^dたゞひとめ見しやとりなりと、思ひ出給ふに、^e折しも時鳥鳴て渡る。もよほしかほなれば、例のこれみつしておどろかし給へば、内よりかくそゑいし給いける。

^aこととふ(花散里 505頁) ^b人知れぬ御心づからのもの思はしさは(同 563頁) ^cささやかなる家の木立などよしはめるに(同前) ^dただ一目見たまひし宿りなりと思ひいでたまふに(同 564頁) ^eをりしもほとときす鳴きて渡る。催しきこえ顔なれば、例の惟光をいれたまふ。(同前)

12 須磨

心ありてひく手のつなのたゆたは、うち過くましやすまの浦なみ

光君、a世の中はしたなきことのみまされば、すまのうらにみつからうつろい給ふ。た、ふる里のこののみ、あけくれおもほし給ふ。其頃つくしの大武、都へ登りけるが、b君かくておわすとき、て、子のちくぜんの守してしやうそこしける。むすめのc五せちの君は、つなでひき過も口おしきに、琴のこへ風につきてはるかにきこゆる、ゑしのばて、

琴の音にひきとめらる、つなでなはたゆたふ心君しるらめや

dすきくしさも、人などがめそときこへたり。かく御かへし。

a世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば(須磨 570頁) b大将かくておはすと聞けば(同 614頁) c五節の君は、綱手ひき過ぐるも口惜しきに、琴の声風につきて遙かに聞こゆるに(同前) dすきずきしさも、人な咎めそと聞こえたり。(同 616頁)

13 明石

光君すまよりあかしの浦へ立出たまえば、あかしのa入道けふの御もふけ、いといかめしうつかうまつれり。人く、下の品までたびのさうそくめつらしきさまなり。君にbけふ奉れる旅の御そうそくに、

よる浪にたちかさねたる旅衣しほとけしとや人のいとはんとあれは御かへし、かくなん。

あふことのひかすへだてむなかのころことをかたみそかふべかりける

a 入道、今日の御設け、いとかめしう仕うまつれり。人々、下の品まで旅の装束めづらしきさまなり。(明石 681頁) b 今日、奉るべきかりの御装束に(同前)

14 みをつくし

かすならぬみしまがくれに鳴たつもけふもいかにととふ人ぞなき

あかしには、若君いだしきさせ給ひて、やうく a 五十日にあたるらんとおほして、いそぎ御使を下し給ふ。御文に、

うみ松やときぞともなきかげにゐてなにのあやめもいかにわくらん

と有ければ、入道も嬉しく、女君、b めのとまてかたしけなく、御かへしには。

a 五十日にはあたるらんと(落標 18頁) b 「乳母のことはいかに」など、こまやかにとぶらはせたまへるも、かたじけなく(同 20頁)

15 蓬生

光る君、花ちる里を忍び出給ふ。道すがら a 家の木立しげくもりのやうなるを過給ふ。松にふしの咲か、りて、月かげになよひたる、風につきてさと匂ふ香なつかしく、b 此宮なりといとあわれにて、れいの、これみつあないして入給ひて、年月のへた、りしおほつかなとかたり給ふ。君、

藤浪のうち過がたくみえつるは松こそ宿のしるしなりけれ

との給へは、御かへしかく、

としを^へ経てまつしるしなき我やとを花のたよりにすきぬばかりか

a 家の木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。大きな松に藤の咲きかかりて月影になびきたる、風につきてさと匂ふがなつかしく(蓬生 69頁) b この宮なりけり。いと哀にて、おしとどめさせたまふ。例の惟光は(同

70頁)

16 関屋

行^ゆとくとせきとめがたき涙をやたえぬしみづと人は見るらん

おもへる女の、遠^とき国^{くに}よりのぼれるに、ゆかしき男の旅^{たび}の道なる関^{せき}にて、行^ゆ合^あたれど、しのぶれは、a 人しれす、むかしわすれねは、かくごちて、b 糸しりたまはじとおもふに、かひなし。

a 女も人知れず昔のこと忘れねば(関屋 84頁) b え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし。(同前)

17 絵合

しめのうちはむかしにあらぬ心地^{こゝち}して神代^{かみよ}のこともいまは恋^こしき

a 御門^{みかど}、絵^ゑを興^きある物にすかせ給^{たま}ひて、そのころ梅^{うめ}つぼのこうきでんなど、絵^ゑをいとませ給^{たま}ふ。b 院^{いん}の御門より、いろく興^きある絵^ゑともを梅^{うめ}つほに奉^たせ給^{たま}へり。c かの大こくてんの御こし、よせたる所のかうくしきに、院の御か

身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせず

とあそはしければ、秋好あきこのみの宮御みやみか多し、かくとなん。

a 上はよろづのことにすぐれて、絵けを興おこするものに思したり。(絵合 97頁) b 院いんにもかかること聞かせたまひて、梅壺つばきに御絵みやまゐども奉ほうらせたまへり。(同 106頁) c かの大極殿おほきよくの御興みやまゐ寄せたる所の神々かみかみしきに(同 107頁)

18 松風

かはらじと契ちぎりしことをたのみにて松まつのひゞきにねをそへしかな

あかしの上、かつらの里さとへうつり給たまひしに、光君あきみとふらひ給たまひて、尼君あまみもろとも、むかし今の御物みやものかたりありて、a 月のあかきにかへり給たまふbおり、すぐさま、かのさんの御琴みやことさし出たり。そこはかとなく物哀ものあはれなるに、君、

ちきりしにかはらぬ琴ことのしらべにてたえぬ心のほどをしりきや

とありしかは、女君にょきみかくとなん。

a 月の明あききに帰かへりたまふ。(松風 138頁) b をり過あぐさず、かの琴ことの御琴みやことさし出でたり。そこはかとなく物哀ものあはれなるに(同前)

19 うす雲

光君あきみかの大井おほいの山里やまのに渡り給たまふとて、a つねよりことにうちけたうして出立たち給たまへは、b 紫むらさ上のうたゞならず見奉まりおくり給たまふ。c 「あすかへりこん」と口くちずさひ出給たまふに、わだとの、口くちにまちかけて、中将ちゆうじやうの君きみして聞きえ給たまへり。

舟とむるをちかた人のなくはこそあすかえりこんせなとまぢみめ

d いたうなれてきこゆれば、君ほ、ゑみて、かくは御返しありていで給ふ。

行て見てあすもさねこん中なかにをちかた人はこ、ろおくとも

a 常よりことにうち化粧けさうじたまひて(薄雲 164頁) b 女君ただならず見たてまつり送りきこえたまふ。(同前)

c 「あす帰り来ん」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまふ。(同前)

d いたう馴れて聞こゆれば、いと匂ひやかにほほ笑みて(同 165頁)

20 朝がを

なへて世のあはれはかりをとふからにちかひしこと、神かみやいさめん

a あさ顔かほの齋院さいいんは、父宮ちのみやうせ給ひて、御ふくにておりゐさせ給ふ。源氏の君、れいの思まぶし染まぶつることたへぬ御くせにて、御とふらひなどいとしげうきこへ給ふ。b せんじの君、たいめんして御せうそきこゆ。「今さらに、わかしくしき心地こゝちするみすのまへかな。神さびにけるとし月のらうかぞへられはべるに、いまはうちとゆるさせたまひてんとて、

人しれず神のゆるしをまぢしまにこ、ろつれなき世よをすぐすかな
と詠あしたまへば、せんじのきみして、かくそ御こたへあり。

a 齋院は、御服にておりゐたまひにきかし。おとど、例の思しそめつること絶えぬ御癖にて、御とぶらひなどいとしげう聞こえたまふ。(朝顔 196頁) b 宣旨、対面して、御消息きこゆ。「今さらに若々しき心地する御簾の

前かな。神さびにける年月の勞数へられはべるに、今は内外もゆるさせたまひてんとぞ (同 200頁)

21乙女

いろくゝに身のうきほどのしらるゝ、はいかにそめける中の衣に

夕霧の若君、雲ゐのかりとおさなきより祖母大宮の御かた a ひとつ所にておひたち給しが、いつのほどより御物心お
わせしを、父おとゞ、ほの聞つけ給ひ、ことにいましめおぼしけるを、人くゝ b いとおしみおもひけり。女君のめ
と、男君の位あさきことをはしたなみて、「c 物のはじめの六位すくせよ」とつぶやきけるを、男君ほのきゝて、

くれないの涙にふかき袖の色をあさみどりとやいひしおるべき

d 「はづかし」とのたまへば、女君の御かへし、かくとなん。

a ひとつにて生ひ出で給ひしかど (少女 245頁) b いとほしく思ふ。(同 255頁) c 「物のはじめの六位すく
せよ」とつぶやくも、ほの聞こゆ。(同 267頁) d 「はづかし」とのたまへば (同 268頁)

22玉葛

としを經ていのる心のたかひなは鏡の神をつらしとや見ん

a 夕顔の御めのとのおとこ、少弐になりて、つくしへ下りけるか、玉葛の若君いとけなければ、いて下りぬ。かの
国に廿とせあまりすくして、b そのわたりにもよしある人は、此少弐のむまごをぞこひけり。c たゆふのげむとて、
ひごの国にいかめしき兵あり。むくつけき心の中にいさ、かすきたる心のまじりて、d 此姫きみをねん比にいひかた

れ共、めのと、そらごとしていなみければ、こ、にきてしいてむかへんとて、^e歌よまんとて、や、久しうおもひめぐらし、かく、

君にもし心たかはは松浦なる鏡の神をかけてちかはん

と、^fよき歌をつかふまつれりとじまん顔なるに、めのとおそろしくて、かくぞかへしよみけり。

a その御乳母のをとこ、少式になりていきければ、下りにけり。(玉鬘 300頁) b そのわたりにも、いささかよしある人は、まづこの少式の孫のありさまを聞き伝へて、なほ絶えず訪れ来るも(同 305頁) c 大夫の監とて、肥後の国に族ひろくて、(略) 勢ひいかめしき兵ありけり。むくつけき心の中に、いささか好きたる心のまじりて(同前) d この姫君を聞きつけて、(略) いとねんごろに言ひかかるを(同前) e 歌詠ままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして(同 309頁) f 「この和歌は、仕うまつりたりとなん思ひたまふる」と、うち笑みたるも(同 310頁)

23 はつね

a 年たちかへりて、そらのけしきうら、かに、b をのつから人の心のひらかにみゆるかし。光君、春のおとへ渡り給ふとて、さふらふ人く打とけて、おのがどちいわるごととして、そほへあへるに、君、さしのぞき給ひて、「^dみなをのく思ふことの道あらんかし。すこしきかせよ。我ことぶきせん」とうちわらひ、すき給ひて、うへにわたらせ給ひて、

うす氷とけぬる池のかゞみには世にくもりなきかけぞならべる

と詠し給ひければ、紫むらさき上のうへかく、いわる給ひしとかや。

曇くもなき池いけのか、みに万代よろつよをすむべきかけぞしるへ見みえける

a 年たちかへる朝あしたの空そらのけしき、名残なく曇くもらぬうららかげさには（初音 356頁） b おのづから人の心ものび
らかにぞみゆるかし。（同前） c 年の内の祝いわらひごとどもして、そぼれあへるに、おとどの君さしのぞきたまへれば
（同前） d 「みなおのおの思おもふことの道みち々々あらんかし。すこし聞かせよや。我われことぶきせん」と、うち笑わらひたま
へる（同 357頁）

24 胡蝶

六条院ろくじょういん、春の御まへにて御遊まよのあした、螢あきの宮、a 御かはらけのついでに、b いたうそらゑいして、玉かつらの事
を、源氏の君にほのめかし給て、

むらさきのゆへにこゝろをしめたればふちに身なげん名やおしけき
とありければ、けんじのおと、c いたうほ、ゑみ給ひてかくとなん。

ふちにみをなけつべしやとこの春は花のあたりを立たさらてみよ

a 御かはらけのついでに（胡蝶 386頁） b いたいたうそら乱れして（同 385頁） c いたいたうほほ笑わらみたまひ
て（同 386頁）

25 ほとたる

顛あらはれていと、浅あさくもみゆる哉あやめもわかすなかれけるねの

源氏、玉かづらの君を、みつつからの御子のやうになし給ひて、aすぎ給ふ人々の御心まとはさんとかまへ給ふ。ほとたるの宮なん、せちに恋給ふ。宮よりあやめの日、御文あり。

けふさへやひく人もなきみかくれにあふるあやめのねのみなかねん

とありければ、「君もb御返しし給へ」とそ、そ、のかし出給ひぬ。人々も「なを」と聞れば、御心にもいか、思しけん、かくなん有しとかや。

aすきたまひぬべき心まどはさんと、構へありきたまふなりけり。(蛩 415頁) bけふの御返り」など、そそのかし置きて出でたまひぬ。これかれも、「なほ」と聞こゆれば、御心にもいかが思しけん(同 419頁)

26 常夏

a内のおほいと、外はらのみむすめを尋ねもとめ給いて、近江の君とそきこえし。御姉君、今の女御こうきでんと申奉る。この御方へあづけ給はんとて、此君より女御へ御文あり。そのはしに、

草わかみひたちの浦のいか、さきいかであひみんだこのうら浪

とあれは、b中納言の君といふ、いとちかふさふらひて、そぼく見けり。いまめかしき御文のけしきやと此君かわりて、cせんじかきめきて、かく、

常陸なるするかの海のすまの浦に波たち出よはこ崎の松

a おとどの外腹ほかばらのむすめ尋ねいでて（常夏 443頁） b 中納言の君といふ、いと近うさぶらひて、そばそば見けり。「いと今めかしき御文の気色にも侍るかな」（同 471頁） c 宣旨書きめきては、いとほしからん」とて、ただ御文めきて書く。（同 472頁）

27 篝火

a 秋にもなれば初風す、しく吹いて、浦うらさびしき心地こゝちし給ふに、忍ひかねつ、玉かつらの御方へしばく渡り給ふて、b 萩はぎの音もやうくあわれなるほとに成にけり。c 庭のか、り火も少きへかたなるを、

か、り火にたちそふおもひの煙けかりこそ世にはたへせぬほのふなりけれ
と詠あひし給へは、玉かつらの君かく、

行衛あなき空そらにそひてよか、り火のたよりにたくふけふりとならば

a 秋にもなりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣ころももうらさびしき心地したまふに、忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて（篝火 477頁） b 萩はぎの音ねもやうやうあはれなるほどになりけり。（同前） c 御前まへの篝火かがりびすこし消えがたなるを（同前）

28 野分

六条院ろくじやういんのいつこもく御心あはた、しく、よひとふきあかして、a やうくあかつきに風少ししめりて村雨むらみのやうにふりいづる。源氏の君も御子の中将御ともにて、かたくへ風のおとつれに出させ給ふ。玉かつらの御方へ渡り給

いて、物のたまいかはし給へは、女君、

吹みたる風のけしきにおみなへししほれしぬへき心地こそすれ

とbくはしくもきこえぬに、君もかく有て出給ふ。

白露になびかましかは女郎花あらし風にはしほれざらまし

a 暁方に風すこししめりて、むら雨のやうに降りいづ。(野分 489頁) bくはしくも聞こえぬに(同 500頁)

29 御幸

あかねさす光りはそらに曇らぬをなとて御幸にめをさらしけむ

a 大原野の行幸とて、のこる人なく見さはくを、b玉かつらの君も立出給へり。そこばくいとみつくし給へる人の御かたちありさまを見給ふまゝに、御かとのうるはしうこきなき御かたはらめに、なすらいきこゆへき人なし、と思し給ふ。c 又の日、源のおとゞ、女君へ御文あり。「きのふ、うへは見奉らせ給ひてきや。かのことは、おほしなひきぬらんや」ときこゑ給へり。「dよくも、おしはからせたまふものかな。」と覺す。御かゑりに、「きのふは、うちきらしあさくもりせしみゆきにはさやかにそのらの光やは見し」

とありければ、君よりもまた御かへし、かくとなん。

a 大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを(行幸 508頁) b 西の対の姫君も立ち出で給へり。そこばくいとみ尽くしたまへる人の御かたちありさまを見給ふに、帝の、赤色の御衣奉りて、うるはしう動きなき御かたはら目に、なすらひきこゆべき人なし。(同 510頁) c またの日、おとど、西の対に、「昨日、上は見たてまつら

せたまひきや。かのことは思しなびきぬらんや」と聞こえたまへり。(同 513頁) dよくも、おしはからせたまふものかなと思す。御返りに、「昨日は(同 514頁)

30 藤袴

玉かつらの君、^a内侍のかみの御宮つかへのことをたれくそ、のかし聞え給ふ。兵部卿の宮より御文有て、

朝日さすひかりをみて玉さ、の葉わけのしもをいたすもあらなん

其ほか、髭黒の大將、左兵衛督など、いつこよりもせちにこひ給へとも、女君、何とも思ひさためかたく、かたく

より御文有しかども、御返ことさせ給はざりしか、^b宮の御かへりをいかおほすらん、たゞいさ、かにかくなん。

心もて日影にむかふあふひたに朝おく霜ををのれやはけつ

^a内侍のかみの御宮つかへのことを、誰も誰もそそのかしたまふ(藤袴 546頁) ^b宮の御返をぞ、いかが思す

らん、ただいささかにて(同 565頁)

31 卷柱

髭黒の大將、玉かつらの君を我みたちへ渡し給はんとて、北の御方え、よきにかたらひなしたまひて、御ぞよそひ

つ、出給はんとし給ひしに、北の御方、^aにはかに御物けおこりて、そばなる火とりの香炬をとりて、男君の後よ

り、さといかけ給ふほど、あきれて物し給ふ。^b御ぞかへて、御ゆどのなど、いたうつくるひ給ふ。木工の君、御薰物

しつ、

「ひとりゐてこがる、むねの苦しきに思ひあまれるほのほどぞみし

^c名残なき御もてなしは、見奉る人だに、た、にやは」と口お、ひてゐたる。大将の君かく、

うき事を思ひさはけはさまくにくゆるけふりそいと、立そふ

a にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取をとり寄せて、殿の後ろに寄りて、さといかけたまふほど、(略) あきれてものしたまふ。(真木柱 583頁) b 脱ぎ換へて、御湯殿など、いたうつくるひたまふ。木工

の君、御薫物しつづ(同 586頁) ^c名残なき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」と、口おほひてゐたる(同前)

32 梅枝

^{いろ}色も香もうつる計に此はるは花さく宿をかれずもあらなん

明石の姫君、^a御もぎの御心おきてに、^b薫物合せ給ふ。御かたくよりも、ふるき方のめてたきを、いろく奉ら

せ給ふ。「^c匂ひふかさあさ、も、かちまけのさだめあるべし」との給いて、ほたるの宮なん判者になし給ふ。^d

お、みきなど参り給て、御遊ひある。^e宮のおまへにびは、おとにさうの琴、^f頭中将和ごん、^g宰相の中将横笛、

ささらぎの初つ方なれば、^gおかしき夜の御遊ひなり。御かはらけまいるに、ほたるの宮、

「鶯のこゑにやいと、あくがれん心しめつる花のあたりに

^h千代もへぬべし」と聞へ給へは、源氏の君もかくなん。

^a御装着のこと思しいそぐ御心おきて(梅枝 618頁) ^b薫物合せたまふ。(同前) ^c「匂ひの深さ浅さも、

勝負かちまけの定めあるべし」と、大臣おとどのたまふ。(同 619頁) d大御酒みきなどまゐりたまひて(同 626頁) e宮の御前
に琵琶、大臣おとしに箏の御琴まゐりて、頭中将、和琴賜りて(同 627頁) f宰相の中将、横笛吹きたまふ。(同前)
gをかしき夜の御遊びなり。御かはらけまゐるに、宮、(同前) h千代もへぬべし」と聞こえ給へば(同前)

33 藤裏葉

なか／＼におりやまとはん藤の花たそかれ時のたと／＼しくも
夕きりの君、雲くものかり、a御もろ恋こひの御中なれど、又おとゞきら／＼しき御心地こころぢに、御こゝろとけ給はさりしか、
男君のなまめかしうbねびゆき給ふを見給ひて、まけてうちとけ給はんとて、cおまへの藤ふじの花のおもしろくさき乱
れたるにことよせて、d頭あたまの中將ちゆうしやうして御せうそあり。

我やどのふじの色こきたそかれにたつねやはこぬ春はるのなごりを
とありければ、夕きりのきみ御かへし。

aさすがなる御もろ恋なり。(藤裏葉 646頁) bただ今いみじき盛りにねびゆきて(同 647頁) c御前の藤の
花、いとおもしろう咲き乱れて(同 649頁) d頭中将して御消息せうじあり。(同前)

34 若菜上

女三の宮の御うしろ見、光君ひなぎにあつけ給ふ。君もにげなくおほせと、院いんのたまはせ給ふも、もだしかたく、うけは
り給ふ。a紫むらさきのうへも、ことにふれて、たゞにもおほされぬ世ありさまの有様なり。かゝるにつけても、はなやかにおひさき

とおく、あなつりにくきけはいにて、うつろい給へるに、なまはしたなく覺おほさるれど、つれなくのみもてなして、いとらうたけなる御有様を、君はいとゞありがたしと思ひきこへ給ふ。女君、

目にちかくうつればかはる世の中をゆくすへとをくたのみける哉かな

と手ならいにし給へは、b けにことはりとおほして、かく書かきぞへ給いしとかや。

命いのちこそたゆともたえめ定めなき世のつねならぬ中のちぎりを

a 対の上も事にふれて、ただにも思されぬ世のありさまなり。げに、かかるにつけても、(略) はなやかに生おひ先遠く、悔りにくきけはひにて移ろひたまへるに、なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、(略)

いとらうたげなる御ありさまを、いとどありがたしと思ひきこえたまふ。(若菜上 727頁) b げに、とことわり

にて(同 729頁)

35 若菜下

光君ひかる a いろ／＼のさかへを見給ふ。神の御たすけはわすれがたくて、紫の上むらさきのうへをもぐし給ひて住吉すみやしにまふでさせ給ふこ

といそぎ給へども、ひゞきよのつねならずいみじく、b まい人はゑぶのすけとものかたちきよげにえらはせ給ふ。c

こと／＼しきこま、もろこしのがくよりも、あづま遊あそびのみ、なれたるはなつかしくおもしろし。d 君もむかしの事

おほし出れと、そのことうちみたれかたろふべき人もなければ、

誰たれかまた心こころを知りて住吉すみやしの神かみよをへたるまつにこととふ

e 紫上むらさきのうへも都みやこの外のありきは、まだならひたまはねば、めつらしくおほしめしてかくなん。

住すの江ゑの松まつに夜よふかくおく霜しもは神かみのかけたるゆふかつらかも

a かかるいろいろの栄えを見たまふにつけても、神の御助けは忘れがたくて、対の上も具しきこえさせたまひて、詣でさせたまふ。響き世の常ならず。いみじく事どもそぎ捨てて（若菜下 832頁） b 舞人は、衛府の次将すけどもの、かたち清げに丈ひらだち等しきかざりを選えらせたまふ。（同前） c ことごとしき高麗こま、唐土たうこの樂よりも、東遊の耳馴れたるは、なつかしくおもしろうく（同 834頁） d おとど、昔のこと思し出でられ、（略）その世のこど、うち乱れ語りたまふべき人もなければ（同 835頁） e 対の上、（略）都の外の歩あきは、まだならひたまはねば、めづらしくをかしく思さる。（同 837頁）

36 柏木

柏木かしわきの右衛門督みえのくみうせ失給ひて、女三（マ）の宮、母君、諸共もろ歎なげきくらさせ給ひしを、夕霧ゆふきりの大將たいしやうしばく御とふらひ物したまひ

帰り給ふとて、a 御前みまへ近ちかき桜さくらのいとおもしろうきを見たまひて、

時ときしあれはかはらぬ色いろに匂におひけりかたへかれにし宿やどの桜さくらも

と、b わざとならずよみなして立た給たふに、母君いととう、

この春はるは柳やなぎのめこそ玉たまはぬく咲さちる花はなの行衛ゆくゑしらねは

a 御前みまへ近ちかき桜さくらのいとおもしろうきを（柏木 989頁） b わざとならず誦ずじなして立ちたまふに、いととう、（同前）

37 横笛

うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路やまぢに思おもひこそいれ
女三あまの尻しつみやに、院いんのみかじより御ごいとおしおほしやりて、aたへず御ごせうそこあり。御ご寺てらのかたはらにぬきいで
たるたかうな、ところなどおくらせ給ふとて、

世をわかれ入いなんん道みちはをくるともをなしとてを君きみもたづねよ
とあれは御ご返へんし。

a絶たえず聞きこえたまふ。御ご寺てらのかたはら近ちかき林はやしにぬき出いでたる筈たかうな、そのわたりの山やまに掘ほれる野の老らうなどの、山やま里りに
つけてはあはれなれば、奉ほうれたまふとて(横よこ笛ふエ 3頁)

38 鈴虫

へだてなく蓮はちすのやとをちきりても君きみが心こころやすましとすらん

入い道だうの姫ひめ宮みやの aおましをはにほゆつりたまひて、供く養やうせさせ給たまふ。 bこのたびはおとゞの君きみの御ご心こころさしにて、御ご念ねん誦じゆた
うの具ぐ共ども、こまかにと、のへさせ給たまふ。「cかゝるかたの御ごいとなみをも、もろともにいそがんものとは、おもひよ
らさりしことなり。よし、後のちの世よにだに、かの花はなの中なかのやどりへだてなくとおもほせ」とて、

蓮はちすばをおなしうてなと契あひまりおきて露つゆのわかる、けふぞかなしき

と、dかう染そめなる御ご扇あふぎに、書かつけ給たまへり。そのはしに宮みや、かくなん、かきそえたまふ。

a御ご座ざを譲ゆづりたまへるはの御ごしつらひ(鈴すず虫むし 31頁) bこのたびは、おとどの君きみの御ご心こころさしにて、御ご念ねん誦じゆ堂だうの

具ども、こまかにととのへさせたまへるを（同 28頁） c かかるかたの御宮みをも、もろともに急がんものは思ひよらざりしことなり。よし、後の世にだに、かの花の中の宿りに、へだてなくと思ほせ」とて（同 31頁） d 香染なる御扇に書きつけたまへり。（同前）

39夕霧

夕きりの大将はおちばの宮に御心まどひ給ふて、雲井のかりのうらみ給ひしを、むかしよりの御契りのほどあさからぬ事などとはり給ひて、 a けさうして出給ひしかば、女君、

なる、身をうらみよりは松しまのあまの衣にたちやかへまし

とあれは、男君御返しとて、

松しまのあまのぬれぎぬなれぬとてぬきかへつてふ名をたゝめやは

a 化粧じて出でたまふを（夕霧 123頁）

40御法

紫のうへ、うせ給いしかば、 a 秋好中宮より御弔御せうそこあり。

かれはつる野へをうしとやなき人の秋に心をとゞめざりけん

紫の上は春をこのみ給ふゆへ、かく詠し給ふなり。光君御かへし、

のぼりにし雲井なからもかへりみよわれあきはてぬつねならぬ世に

a 冷泉院の後の宮よりも、あはれなる御消息絶えず (御法 160頁)

41 幻

紫のうへうせ給ひて、としもかへりぬ。光君、a 春の光を見給ふにつけても、いとゞくれまどひたるやうに過し給ふ。人々まいらなどすれど、御心地なやましきやうにもてなし給ひて、みすの内のみおはします。兵部卿の宮わたり給へるにぞ、たいめんしたまはんとて、御せうそきこへ給ふ。

我やどは花もてはやす人もなしなに、か春のたづねきつらん

とあれは、b 宮うち涙ぐみて御返しかく、

香をとめてきつるかひなく大かたの花のたよりといひやなすべき

a 春の光を見たまふにつけても、いとゞくれまどひたるやうにのみ、(略) 人々参りたまひなどすれど、御心地悩ましきさまにもてなしたまひて、御簾の内のみおはします。兵部卿の宮渡りたまへるにぞ、ただうちとけたる方にて対面したまはんとて、御消息聞こえたまふ。(幻 164頁) b 宮、うち泪ぐみ給ひて (同前)

42 句宮

a にほふ兵部卿、かほる大将と世にめできこへける。殊にかほるの君は院の御いつくしみふかく、いつこもゞ御いとおしみ、はなやかなり。b かほかたちも、すぐれたる、あなきよらとみゆる所もなきが、たゝいとなまめかしうはづかしげに、心のおくお、かりけるけはひ、人ににぬなりけり。香のかんばしさ、よのつねの匂ひにあらす。c 御

まへの花の木も、はかなく袖かけ給ふ梅の香は、
色よりも香こそあわれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも
となん見えたり。

a 例の世の人は、にほふ兵部卿、かほる中将と、聞きにくく言ひつづけて (匂宮 219頁) b 顔かたちも、そこ
はかと、いづこなんすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしう恥づかしげに、心
の奥多かりげなるけはひ、人に似ぬなりけり。香のかうばしさぞ、この世の匂ひならず (同 217頁) c 御前の
花の木も、はかなく袖かけたまふ梅の香は (同 218頁)

43 紅梅

あぜち大納言より、かさねて歌奉らせ給ふ。

もとつかのにはへる君か袖ふれは花もえならぬ名をやちらさん

a とまめやかにきこへ給へは、さすがに御心ときめきし給ひて、匂宮御返し、

花の香をにははすやどにとめゆかば色にめつとや人のとかめん

a と、まめやかに聞こえたまへり。(略) さすがに御心ときめきし給ひて (紅梅 242頁)

44 竹河

かほるの君のすみ給ふ a 三条の宮ちかければ、いつもこなたへまいりかよひ給ふを、玉がつらの君、いとうつくしみ

給ふ。b 御念誦堂におはして、「こなたへ」との給へは、かほる、君戸口のみすのまへに居給へり。おまへ近きわか木の梅、心もとなくつぼみて、鶯の初こゑ、いとおほとかなるに、ことすくなに心にくきほどなれば、人々ねたがりて宰相の君、

折てみばいと匂ひもまさるやとすこし色つけ梅の初花

と詠れければ、c ぐちはやしときて、君、御かへし、

余所にてはもぎ、なりとやさたむらん下に匂える梅の初花

a かの三条宮といと近きほどなれば(竹河 254頁) b 尚侍の殿、御念誦堂におはして、「こなたに」とのたまへば、東の階よりのぼりて、戸口の御簾の前にあたまへり。御前近き若木の梅、心もとなくつぼみて、鶯の初声もいとおほとかなるに、(略) こと少なに心にくきほどなるをねたがりて、宰相の君と聞こゆる上臈の詠みかけたまふ。(同 258頁) c 口はやしと聞きて(同 259頁)

45 橋姫

いかでかくすだちけるそと思ふにもうき水鳥のちきりをそしる

源氏には御おぢ、うばそくの宮と申せしか、北の方うせ給ひて、御姫君ふた所ありしを、いつくしみはぐ、み給ふ。a 春のうら、かなる日かけに、池の水鳥とも、はね打かはして、つがひはなれぬを、うら山敷詠給ひて、

うちすて、つかひさりにし水鳥のかりのこの世にたちをくれけん

姫君へもb 紙奉り給へは、c おいさき見へて、あね君。

a 春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの羽うちかはしつづつ（略）つがひ離れぬをうらやましくながめたまひて（橋姫 311頁） b 紙奉りたまへば（同 313頁） c 手は生ひ先見えて（同前）

46 椎本

遠近の汀の波はへだつともなを吹かよふ宇治の川風

a 二月廿日のほど、兵部卿、はつせに、もふで給ふ。b 宇治の中やどりのゆかしさに、もよほされ給へる也。c かん達部いとあまた、つかうまつり給へる。d 御琴、笛など、めして遊び給ふ。e 水の音もすみ渡る心地して、かのひしりの宮にもさし渡るほどなれば、追風にふきくるひゞきをき、給ふて、f かれよりかほるの君へ御文あり。

山風に霞ふきとく声はあれどへたて、見ゆるおちのしら波

g 匂宮おぼすわたりと見給へは、いとおかしうて、此御返しは我せんとて、かくなん。

a 二月の二十日のほどに、兵部卿の宮、初瀬に詣でたまふ。（椎本 358頁） b 宇治のわたりの御中やどりのゆかしさに、多くは催されたまへるなるべし。（同前） c 上達部いとあまた仕うまつりたまふ。（同前） d 御琴など召して遊びたまふ。（同 359頁） e 水の音ももてはやして、物の音澄みまさる心地して、かの聖の宮にも、たださし渡るほどなれば、追ひ風に吹きくる響きを聞きたまふに（同前） f かれより御文あり。（同 361頁） g 宮、思すあたりと見たまへば、いとをかしく思いて、「この御返りは我せん」とて（同前）

47 総角

八の宮うせ給ひて、姫君^{ひめぎみ}ふたかた物あわれにすぐし給ふを、かほる大将は宮のほめかし給ふ御一こともありて、ふりがたく、おりくくとむらひ給ふ。匂宮も此姫君のことゆかしう思ひ給ひて、大将の君にそ、のかし給ふ。大将、中の君をすみつけ給ひて、宇治^{うち}に忍ひてあい奉らせ給ふ。京にかへり給はんとて、

中た多ん物ならなくに橋姫のかたしく袖や夜半にぬらさん

a 出がてに、たちかゑりつ、やすらふ。中の君かく御かへし、

絶^{たへ}ぜ^ましの我^わた^かのみにや宇治^{うち}はしのはるけき中^{なか}をまちわたるべき

a 出がてに、たち返りつつやすらひたまふ。(総角 469頁)

48 早蕨

中の君を京へ御むかへさせの御もやうし、かほるの君、宇治^{うち}に渡り給いて、何かその御おきてせさせ給ふ。弁^{へん}の尼^にとて此宮^{みや}にふるくつかふまつれるおい人、かほるの君も、いとふひんにし給^{たま}へしか、宇治の宮にのこしおき給はんはいと心ほそかるべしと、折^{おり}くは物の給ひて、末^{すえ}くも心ゆきたるけしきにて、京へ出なんいそきなど見て弁^{へん}の尼^に、

人はみないそきたつめる袖^{そで}の浦^{うら}にひとりもしほ、たる、尼哉

とかこては、中の君かくなん、

しほたる、あまの衣^{ころも}にことなれや浮^うたる波^{なみ}にぬる、我袖^{わがそで}

a みな人は心ゆきたる気色にて(早蕨 541頁)

49 宿木

藤つほの女御の御はらに、女宮一かたおはします。a かたちなど、いとろうたけに物し給ふ。b 母女御うせ給いで、c はか／＼しき御うしろ見もおはせざりしか、うへもいとあはれにいとをしみ給ふ。d かほる中納言の人よりもことなるを思しよりて、うへにめして御碁うたせ給ひて、「e よきのり物はありぬべけれど、かる／＼しくはえわたすましきを」との給はせて、f 三はんにかずひとつ、まけさせ給ひて、「ねたきわさかな。まつけふは此花一枝ゆるす」との給ひければ、おもしろき枝を折て、

世の常のかきねに匂ふ花ならば心のま、に折てみましを

g とぞうし給へは、御製かくなん。

霜にあへすかれにしその、菊なれとのこりの色はあせすもある哉

a 御かたちも、いとをかしくおはすれば、帝もらうたきものに思ひきこえさせたまへり。(宿木 553頁) 黒き御衣にやつれておはするさま、いとどらうたげに(同 555頁) b 女御、(略) うせたまひぬ。(同 554頁) c 後見と頼ませたまふべき、をちなどやうのはかばかしきひともし。(同 555頁) d 源中納言の、人よりことなるありさまにて(同 556頁) e 「よき賭物(のり)はありぬべけれど、軽々しくはえ渡すまじきを、何をかは」などのたまはする(同 557頁) f 三番に数一つ負けさせたまひぬ。「ねたきわさかな」とて「まづ今日は、この花、一枝ゆるす」とのたまはすれば、(略) おもしろき枝を折りて参りたまへり。(同 558頁) g と奏したまへる(同前)

50 東屋

かほるの君、あげ角の君のうせ給ひて後、思しわする間なく、中の君は匂宮にすみつき給へば、今はむかしにとりかえさまほしくおぼせしに、大君の御かたしろを尋ねいでさせ給ひて、かの宇治の山里にすへおきたまふ。うき舟の君とかやきこへし。おりふしごとにかよひたまひて、よろつおしゑ給ひて、むかしをなをもおもひいてたまふ。a 舟の尼よりくた物まいれり。b しきたるかみに、

やとり木は色かわりぬる秋なれとむかしおほへてすめる月かな

c と、ふるめかしくかきたるを、あわれにおほされて、d わざと返りこと、はなくて、かくの給ふ。

里の名もむかしながらに見し人のおもかわりせるねやの月かげ

a 尼君の方より、くだものまゐれり。(東屋 755頁) b 敷きたる紙に(同前) c と古めかしく書きたるを、恥づかしくもあはれにも思されて(同 756頁) d わざと返り事とはなくてのたまふを(同前)

51 浮舟

なけき侘身をはすつともなき影に浮名なごさんことをこそ思へ

かの宇治の宮に浮舟の君ましましけるに、匂宮忍ひてかたらひ給ひしを、かほるの君ほのき、たまひ、下人にとのひさびしくせさせ給へば、宮も忍人たち給はて、人をよび出し給へば、侍従の君まいりて、かくとつけでなげきければ、宮は其まゝに帰りなんとて、

いづくにか身をばすてんと白雲のか、らぬ山もなくそゆく

侍従しろうかへ歸りて、かくとつくれば、女もやるかたなくて、身をうしなはんの御心そひてかくなん。

52 蜻蛉

常とこなしとこ、ら世を見る浮身うきみだに人のしるまでなげきやはする

a 小さい相しやうの君きみと云人いふ、かたちなとも清きよけなり。おなし琴をかきならすつまおとも人にはまさり、文をかき、物うちいひたるも、よしあるふしをなんそへたりける。匂宮におみやうも年比としひらおほして、れいのいひやり給へとも、宮のあだなるいろくしさをめつらしげなくおもひて、かほる君はすこし人よりことなりとおほす。浮舟うきふねうせ給ひて、ものおほしたるやうも見しりければ、忍しのびあまりて聞へたり。

哀あわれしる心こころは人にをくれねと数かずならぬ身にきへつ、そふる

君、御かへしかくなん。

a 小宰相の君といふ人、かたちなども清けなり。(略) 同じ琴を掻き鳴らす爪音も撥音も人にはまさり、文を書き、ものうち言ひたるも、よしあるふしをなん添へたりける。この宮も、年ごろ、いといたきものにしたまひて、例の、言ひやぶりたまへど、などか、さしもめづらしげなくはあらんと、心強くねたきさまなるを、まめ人は、すこし人よりことなりと思すになんありける。かくもの思したるも見知りければ、忍しのびあまりて聞こえたり。(蜻蛉 891頁)

53 手習

a 九月になりて、尼君はつせにもふづ。「手ならひの君も*b*いさ給へ」とそ、のかしたつれと、「*c*心地いとあしければ」といなみたまへは、しいてもいさな給はず。女君、

はかなくて世にふる河のうき瀬にはたつねもゆかし「*二*もとの杉*三*
*d*と手習にまじりたるを、あまきみ見つけて、おなしさまに、

ふる河の杉のもとたちしらねともすきにし人によそへてぞ見る

a 九月になりて、この尼君、初瀬に詣づ。(手習 968頁) b 「いざたまへ。(略)」と、そそのかしたつれど(同

前) c 「心地のいとあしうのみはべれば、(略)」とのたまふ。(略) しひてもいざなはず。(同前) d と手習に

まじりたるを、尼君見つけて(同 969頁)

54 夢浮橋

世の中は夢のわたりの浮はしかうち渡しつ、物をこそおもへ

浮舟うせ給ひし事、いづこも〜*a*夢のやうにあやしみ給ふに、小野に物し給ひたるやう、さたしあれば、かほるの君、まつ、ひえの山にのほりて、僧都にくはしく尋ねもとめ給ひて、こま〜い、やり給ふ。*b*さま〜につみおもき御心おば、そうつにおもひゆるしきこへて、今はいかて、あさましかりし世の夢がたりをいそがる、心の、われなからもとかしきとなん。そも〜夢の浮はしといふこと、此物語一部の物名なるへし。されは眞実はみな夢の浮世となん古き歌にもかくなん。

a 夢と覚えて、いとあやし。(蜻蛉 852頁) 夢のやうにて(蜻蛉 853頁) b さまざまに罪重き御心をば、僧都に思ひゆるしきこえて、今はいかで、あさましかりし世の夢語りをだにと急がるる心の、我ながらもどかしきになん。(夢浮橋 1034頁)